

中原中也記念館

# 館報 2026

31

Public relations magazine

第31号

【特別寄稿】

## 原田和明のオートマタと中原中也

— 展覧会の生ひ立ちの歌 —

原田和明

【テーマ展示】

詩集『在りし日の歌』

【特別企画展】

中原中也の〈声〉—— 朗読とラジオ放送

【企画展】

企画展Ⅰ 中也と横浜

企画展Ⅱ 中也、この一篇——「汚れつちまつた悲しみに……」

【新収蔵資料紹介】

吉田瀬生氏旧蔵中原中也関係資料

【記念館ニュース】

さようなら旧市庁舎プロジェクト

公開講演 福島泰樹氏 短歌絶叫コンサート「中原中也、復活の歌」

第10回ぼうしの詩人賞 ～あつまれ！未来の中也たち！～&10周年関連事業

主なできごと(2025年度行事記録)

第31回中原中也賞

2026年度行事予定

# 原田和明のオートマタと中原中也

## — 展覧会の生ひ立ちの歌 —

原田 和明

僕は妻のめぐみと二人でオートマタ、つまりイギリス発祥のからくり人形を作っています。

二〇二五年一月から約二か月半、中原中也記念館で「原田和明のオートマタと中原中也」という展覧会を開催しました。この展覧会のために、中也の詩をモチーフにした新作を十点制作しました。

最初の打ち合わせの席で館長から「中也の詩をモチーフにした新作が一、二点でもあれば嬉しいです」とのお話がありました。けれど軽率な僕は、せっかくなら十点作りましょう、と言ってしまいました。もちろん、中原中也記念館で展示ができるなら、精一杯頑張りたいという気持ちから出た言葉です。同時にまだまだ展示が始まるまでに二年くらいの期間があるから十点くらいは何とかなるだろうという思いもありました。この時点では、僕の上に降る雪は真綿の

ようでありました。

自ら言ってしまった以上、前進あるのみ。まずはどの詩をオートマタにするか、中原中也全詩集を読むことにしました。読み始めて、何となく不安になったのですが、読み終わってその不安は確信に変わりました。中也の詩をオートマタにするのを簡単に考え過ぎていたようです。僕の上に降る雪は霰みぞれのようでありました。

なぜオートマタにしにくいと思ったのか、その理由を正直に告白すると、中也の詩を読んで「ちょっと何言ってるのか分からない」が多かったからです。何となく雰囲気は伝わる気がするけど、正しく理解できているのか自信がありません。こんな理解度でオートマタを作っても良いものか？ そもそも、はつきりと捉えきれない詩に形と動きを与えることができるのか？

途方に暮れながら何度も詩集を読み返していると、ふと、手がかりが見えてきました。いくつかの詩の断片から動きを伴う情景が頭に浮かんできたのです。それまで中也の詩をきちんと理解しなければ、という思いにとらわれ過ぎていたようです。ある詩を読んでいても、ここには理解できないと思う部分に出くわすと、僕には理解できないと思う部分に出くわすと、すぐにページをめくって次の詩へと飛んでいました。でも、たとえ詩の全てが理解できなくても、シンプルに僕はこの詩のこの部分を読んでこんな情景が頭に浮かんだ、というのをオートマタにすれば良いのでは？ そう思い直してからは、オートマタになりそうな詩がどんどん見つかりました。もしかしたら、中也の心にあつた情景とは違うかもしれない。でも、詩を読んで何が心に浮かぶかは、こちらの自由。ああ、僕は自由だ！ 心が軽くなって、制作が進み始めました。

自由と言ったって、理解できなくてもいいやと開き直ったわけではありません。できるかぎり中也のことを知ったうえで、詩から受け取ったイメージをよりはつきりさせていきたいと思いました。そのために中也についての研究書や、中也と近い時代の詩人の詩集を読んだり、中也記念館に足を運んだりしました。そのときに出会ったのが、中也記念館に展示されていた『山羊の歌』の復刻本です。

僕は『山羊の歌』の普及版を持っていたのですが、記念館で初版本の復刻本（麥書房）を見て、まずサイズの違いに驚きました。僕が持っているものよりずいぶん大きい。詩集としてはかなり大きめと言っているサイズでしょう。紙もいかに上質な感じがするし、活版印刷で刷られた文字には味わいがあります。何だか、詩が堂々としているように見えました。

中也がこだわり抜いて作った本。そのこだわりが忠実に再現された復刻本。中也はこのような形で自分の作品を鑑賞して欲しかったのだなあ、と感じると、これは何としても手に入れたいなりました。運よくネットの古書店で復刻本が見つかったので、すぐに購入しました。

それからというもの、常にこの本を傍に置いて作業を続けました。と言いたいところですが、大切な本を埃っぽい作業場に置いておきたくあ

りません。普段は文庫本の中原中也全詩集を手元に置いて、ときどき復刻本を箱から取り出してじっくりと読みました。復刻本を手に入れて、思いがけない効果がありました。制作へのモチベーションがさらに上がったのです。若き中也がこの詩集を出すために命を燃やして頑張ったんだなあと思うと、無性に僕もオートマタ制作を頑張るぞーという気持ちが湧いてきました。

他の仕事もあったので、二年もあると思った展覧会の準備期間は、あっという間に過ぎてしまい、気づけば残り四ヶ月で九点の作品を仕上げなければならぬ、という状況になっていました。約二週間で一点のペースです。それまでの僕の制作ペースからすると無理のあるスケジュールでしたが、時間がかかりそうな作品は後回しにしたのと、復刻本によるやる気ブースト効果もあって、途中までは予定通りに制作が進んでいました。そう、途中までは。

仕上がった作品を見ると、中也が命を燃やして作った『山羊の歌』のように、僕もこのオートマタたちを本という形で残したいという気持ちが強くなってきました。デザイナーの方に相談してみると、そのアイデアを気に入ってくさり、本を作ろうという話が急に動き始めました。本を展覧会の会期中には販売開始するとい



「生ひ立ちの歌」青年期



「生ひ立ちの歌」少年期



「生ひ立ちの歌」幼年期

う目標から逆算してスケジュールを立て、本に載せる作品の撮影日が決まりました。本の計画を思いつくまでは、全ての作品が展覧会の初日に間に合わなかったとしても、会期中に新作を追加していくのも良いのでは、と考えてました。しかし、撮影日が決まったからには、全ての作品をその日までに完成させる必要があります。元々、厳しめだったスケジュールがさらに短くなりました。僕の上に降る雪はひどい吹雪とみえました。

一月上旬が撮影日だったので、大晦日も正月も関係なく夫婦で工房に籠って制作をしていました。しかしどう頑張っても、最後に作っていた大作だけは、撮影日に間に合いそうにありません。力作なので、本には載せてもらいたいです。でも、撮影日を遅らせてもらおうと、本の発売も遅れてしまう。うーむ、どうしよう。そんなと

き窮余の一策を閃きました。写真の撮影だから、動かない所があっても写真では分からない。とりあえず完成しているように見える状態まで仕上げよう。この作戦変更により、何とか撮影日に間に合いました。そのオートマタが「生ひ立ちの歌」です。本来は、ボタンを押すと自動的に舞台の幕が上がリ、舞台が三場面切り替わって、幕が閉じる、という動きをします。撮影日は、幕が開閉する部分の自動化がまだ出来ていなかったのですが、手動で幕を上げたり、下げたりして撮影をしていただきました。

大体いつも展覧会をするときは、前日まで準備に追われて大変な思いをするのですが、このときは撮影日までほとんどの制作作業が終わっていました。珍しくゆとりを持って展覧会初日を迎えられた気がします。僕の上に降る雪はいとしめやかに

「四行詩」



降る雪はいとしめやかに  
なりました……

二階の企画展示室内には、中也の詩と学芸員さんたちによる解説文、中也記念館が所蔵する貴重な関連資料、そしてオートマタが一つのセットになって十点展示されました。オートマ

タの後ろの壁面には、僕が中也の詩を読んでオートマタのイメージが湧いた一節を抜き出してカッティングシートで貼ってもらいました。また、展覧会のタイトルの題字には、ブックデザイナ―の故・平野甲賀さんによる文字を、平野家のご厚意により使わせていただくことができました。その題字はポスターやチラシ、本の表紙、さらには会場内に吊るしたタペストリーに使用され、展覧会の格調を引き上げてくれました。

僕が最初そうだったように、中也の詩を読んでも、難しいなあ、と思う方は多いはず。そんな方も、詩と解説文を読み、資料を見て、オートマタを動かせば、中也の詩の世界により親しみを感じてもらえるのではないかと。そう考えて、学芸員さんたちと作り上げた展示空間です。

じっくりと詩とオートマタを交互に鑑賞してきている方々を見ると、こちらの意図が伝わっている手応えを感じて、制作の苦労が報われた。たくさんのメディアが取材してくれたこともあり、展覧会は大盛況。想定よりも多くの来館者数があったそうです。子供からご年配の方まで、いつもより幅広い年齢の方々が来てくれたことも嬉しかったです。

本も予定通り会期中に出来上がりました。タイトルは展覧会と同じく「原田和明のオートマ

「タと中原中也」。内容は展示空間と同様、主に中也の詩、学芸員さんの解説、僕のオートマタで構成されています。展覧会に来てくれた方には、本を開けば展示が思い出せるし、展覧会に来れなかった人でも、どんな展示だったか分かるようになっていています。デザイナーさんが頑張ってくれて、隅々まで配慮の行き届いた美しい本になりました。大満足。あの「生ひ立ちの歌」もいかにも完成した作品として自然に収まっています。

中也記念館に届けてもらった本は、すぐに一階のショップで販売されることになりました。展覧会は盛況だし、本の出来も素晴らしい、これはきつと飛ぶように売れるに違いない。サインを求められるかもしれないからサインの練習をしておこう。ペンもちゃんと持っていこう。などと期待感でそわそわしていたのですが、現実とは厳しいものです。拍子抜けするほど売れませんでした。ただし、そのくらいで気落ちするような僕ではありません。長くオートマタ作家として活動していると、自信作が期待していたほど評価されないということは度々あります。おっと今回もまたそのパターンか！と泣きながら笑いました。

ちなみに『山羊の歌』はどうだったのか調べてみると、元々が限定200部という小部数で

出版されたため、広く一般に売れた本ではなかったそうです。それが今や、文学史上最も価値のある初版本の一つとして扱われています。何という夢のある話でしょうか。ということは、僕の本にまつわる話はまだ終わっていません。むしろ始まってもしないと言ってもいいでしょう。「原田和明のオートマタと中原中也」は中也記念館のショップの片隅にまだひっそりと置かれているはずですよ。ぜひ見つけ出して購入して、皆さんの力でこの話をハッピーエンドにしてください。

僕の上に降る雪に  
いとねんごろに感謝して、神様に  
本が売れますようにと祈りました

## 原田 和明 (はらだ かずあき)

1974年山口県生まれ。2002年よりオートマタ制作を始める。2006年より、ファルマス大学大学院で現代工芸コースを専攻すると同時に、オートマタ制作の第一人者マツ・スミス氏の工房でも研鑽を積む。

2008年に山口市に工房『二象舎』を設立し、オートマタの制作やオートマタコレクション展の企画、オートマタワークショップなどを行なっている。



「正午」

# 詩集『在りし日の歌』

2026.2.18 wed. ▶ 11.29 sun.



1937（昭和12）年9月、詩集『在りし日の歌』のための清書原稿をまとめ終えた中原中也は、友人の小林秀雄に原稿を託し、郷里の山口に引き揚げようとしていました。しかしその翌月、中也是病に倒れ、30歳の若さでこの世を去ります。詩集が刊行されたのは半年後の1938（昭和13）年4月、小林ら友人たちの尽力によるものでした。第二詩集にして遺作となったこの詩集には、「骨」「一つのメルヘン」「月夜の浜辺」「春日狂想」といった中也の代表作など、全58篇が収められています。

本展では、『在りし日の歌』編集の背景をたどるとともに、収録詩の鑑賞などを通じて、詩集『在りし日の歌』の魅力を紹介しました。

## 展示1 『在りし日の歌』名詩選

『在りし日の歌』とはどのような詩集なのでしょう。ここでは収録詩のなかから、中也の代表作とされる作品をピックアップして紹介します。まずは詩を味わうことから、詩集の世界へと誘います。

◎紹介した詩「含羞」「湖上」「骨」「月夜の浜辺」

## 展示2 第二詩集への道のり

第一詩集『山羊の歌』刊行後、中也は次第に活躍の場を広げ、「文学界」「四季」「歷程」などの文芸誌のほか、「改造」「婦人公論」といった総合雑誌や女性誌などにも詩が掲載されるようになります。

1936（昭和11）年前半頃からは、こうした雑誌の作品掲載頁をスクラップし、第二詩集の構想を立て始めていたと考えられます。

ここでは、第二詩集に向けた中也の文学活動について紹介しました。



### 展示3 〈亡き児文也の霊に捧ぐ〉

中也是1933（昭和8）年に上野孝子と結婚し、翌年、長男・文也が誕生します。公私ともに充実した日々を送っていました。1936年秋、2歳になつたばかりの文也が急逝するという悲劇に見舞われます。詩集編集作業は中断しますが、東京から鎌倉へ転居し、静かな生活のなかで再び詩集への意欲を取り戻していきました。

ここでは、文也の死が詩集構想にもたらした変化に焦点を当て、詩集の扉に〈亡き児文也の霊に捧ぐ〉と掲げた中也の深い愛惜の思いに迫りました。

### 展示4 『在りし日の歌』刊行

1937年9月、『在りし日の歌』の清書原稿をまとめ終えた中也是、その原稿を友人・小林秀雄に託し、郷里の山口へ帰る準備を進めていました。しかしその矢先、病に倒れ、10月22日、3歳の若さでこの世を去りました。

中也没後、『在りし日の歌』は小林や青山二郎といった友人たちの尽力により、1938年4月15日、創元社より刊行されました。詩集は高く評価され、2か月後に再版されるほどの売れ行きでした。

ここでは、詩集原稿清書に勤しんだ中也最期の日々、そして没後、『在りし日の歌』が刊行されるまでを紹介しました。

### 固定ケース

『在りし日の歌』には中也が記した「後記」が付されています。そこには郷里での再出発を前にして、〈十五年間の詩生活〉と〈東京十三年間の生活〉に区切りをつけようとする中也の心境が綴られています。

ここでは、〈さらば東京！ お、わが青春！〉という言葉でしめくくられた「後記」の言葉から、中也が『在りし日の歌』に込めた思いをさらに掘り下げました。

展示室では、表紙・扉・献辞・

口絵（肖像写真）・「一つのメルヘン」のページが大きなオブジェになってみなさんをお出迎え。ページに触れ、記念撮影を楽しむコーナーを設けました。



### 《主な展示資料》

中原中也詩集『在りし日の歌』原稿「含羞」「六月の雨」「童女」「小唄二篇」「去年の雪目次」「詩的履歴書」、創作ノート「ノート少年時」「早大ノート」、日記「日記（雑記帖）」「ボン・マルシェ日記」、阿部六郎宛封書（昭和12年7月7日付）、安原喜弘宛書簡（昭和12年9月2日付）、「桐の花」第13号、「紀元」第2巻第6号、肖像写真（中原中也18歳頃／文也を抱く中也）

# 中原中也の

朗読とラジオ放送



2025.7.31(木) - 10.5(日)

特別企画展

# 中原中也の

朗読とラジオ放送



中原中也の詩は、朗読されることで魅力が際立つ、といわれます。中也自身も朗読を好み、自作の詩や宮沢賢治の詩などを、友人たちの前で暗唱していました。録音が残っていないため、私たちが中也が朗読する声を聴くことはできませんが、直接聴いた人の感想によると、低くハスキーな声で、聴衆に強い印象を与える独特な読み方をしていたようです。

中也と同世代の詩人には、詩の朗読を旧世代の行うものとして否定する人も少なくありませんでした。そのなかで中也は、詩の朗読に意義を見だし、積極的に行いました。そこに中也の独自性が見えてきます。

本展では、中原中也と朗読の関係について、急速に普及しつつあったラジオ放送との関わりなども含めた、多様な観点から紹介しました。資料・パネル展示に加え、展示室の6か所にスピーカーを設置し、1930〜60年代に録音された朗読音声を聴ける音響展示も行いました。

## 展示1 朗読の系譜

同じ「詩をよむ」という行為でも、声に出さずに読む黙読と、声に出して読む音読は、意味合いが大きく異なります。

漢詩や和歌などの伝統的な詩歌では、声に出して読むことがたいへん重んじられていました。しかし、明治以降の近代詩では、黙読が読書の常識となり、音読は特別なこととなっていくきます。大正末から昭和初期に活躍したモダニズム詩人たちは、詩の視覚性を

重視し、詩のリズムを重視する旧世代の詩人たちに否定的な言葉を投げかけました。

ここでは、明治以降の近代詩における朗読について時間を追って紹介しました。

## 展示2 中也と「声」

中也は近代詩人のなかでも、特に朗読を重視し、人前で朗読することを好みました。中也の詩には、特殊な振り仮名や「分かち書き」など、朗読されることを前提としたことがわかる詩の特徴が見られます。中也はダダイズムに影響を受けましたが、伝統的な詩歌に端を発する韻律を完全に否定するのではなく、それを生かしながら、新たな詩の韻律を探り、様々な試みを行いました。

ここでは、中也と朗読の関わりを、伝記的事実と詩の特徴の両面から紹介しました。





展示 3

新しい朗読  
——中也、心平、栄三

1934（昭和9）年、「歷程」主催の朗読会で、中也の朗読を聴いた詩人の草野心平は、中也の独特な朗読に魅了され、創刊準備中の詩誌「歷程」に中也を勧誘。中也は創刊同人に名を連ねます。また、自らも朗読会で中也の詩を朗読しました。

声楽家の照井栄三は、心平と同じく「歷程」主催の朗読会で中也の朗読を聴き、のちに刊行した朗読の教則本『詩の朗読』に、中也の「サーカス」を、読み方の指示書き入りで収録しました。その指示は中也が行った朗読の特徴に寄せていると考えられます。心平と栄三は、詩の朗読を先導する役割を果た

しました。

ここでは、心平と栄三二人の朗読との関わりと、新しい朗読のかたちについて、朗読会のパンフレットなどの資料を通じ紹介しました。



展示 4

拡散する「声」  
——ラジオ放送と朗読

中也はラジオを好んで聴いたことが日記からうかがえます。中也が生きた時代は、ラジオ放送が大きく発展し、広く普及した時代でした。中也の詩も歌曲の歌詞として、また、草野心平による朗読により電波に乗り、多くの人々

の耳に届きました。人前で朗読するのが好きな中也ですが、自作の詩がラジオで放送されることにはあまり関心が高かったようです。

中也の没後、日本の戦時体制が強化されると、ラジオと朗読の関係は大きく変わっていきます。朗読される詩は、国民意識を高める「愛国詩」が占め、終戦まで中也の詩がラジオ放送の電波に乗ることはありませんでした。

ここでは、ラジオ放送と詩の朗読の関係について紹介しました。



《主な展示資料》

中原中也詩原稿「吾子よ吾子」、中原中也創作ノート「ノート1924」「ノート小年時」、中原中也日記「ボン・マルシェ日記」、中原中也遺族宛東京詩人倶楽部長田恒雄封書（1937年10月25日）、中原中也着用コート、野々上慶一旧蔵ワインザーチェア、中原中也「山羊の歌」、プログラム「太田綾子独唱 日本歌曲新作演奏会曲目並梗概」「マチネー・ポエティク第1回公演」「第1回 詩朗読の夕べ」「傷兵におくる 戦争詩の夕」、照井豊三「詩の朗読」、蝸管式蓄音機

# 中也と横浜

2025 —  
4.16 Wed.  
▼  
7.27 Sun.

## 展示1 ノスタルジーの源をたどる 祖父・助之、母・フクの物語

中原中也と横浜との関わりは祖父・助之にさかのぼります。助之の娘である中也の母・フクは横浜で生まれ、少女時代の思い出を中也に語り聞かせていました。中也はこのようなゆかりを持つ横浜の地に親近感を抱き、上京後にたびたび訪れました。その経験は「臨終」「秋の一日」「港市の秋」などの詩に反映されています。

本展では、中也の祖父・母と横浜とのつながりや、中也が訪れた大正末期から昭和初期の横浜の風景、横浜を舞台にした作品などを通じ、中也が抱いていた横浜への思慕に迫りました。

## 展示2 中也が歩いた横浜

中也の祖父・中原助之は明治初期に山口から単身上京。英語を学び、語学力を活かして工部省鉄道局で通訳・翻訳者として働きました。同郷の女性、スエと横浜で結婚し、やがて娘のフクが生まれます。助之一家は外国人も住む鉄道官舎に暮らし、フクは西洋文化に親しんで育ちました。しかし、助之が37歳の若さで亡くなり、7歳のフクと母のスエは横浜を離れ、郷里の山口へ移住しました。

フクは横浜で過ごした幼い頃の思い出を中也にたびたび語り聞かせ、〈横浜はいつか中也にとっても、ただの都会

ではなくなっていたかもしれません〉と述べています。

ここでは、中也が横浜に特別な思いを抱く源となった、家族と横浜との関わりについて紹介しました。

## 展示3 横浜を舞台にした詩

1925（大正14）年、中也は中学時代を過ごした京都から上京。以後、たびたび横浜を訪れていました。横浜は1923（大正12）年の関東大震災で壊滅的な被害を受けましたが、中也が横浜を初めて訪れた大正末期はその復興途上の時期だったと考えられます。新たな都市へと生まれ変わろうとする雰囲気を感じながら、中也は横浜の町を歩いていたのかもしれない。

ここでは、中也の手紙や日記、大正末期から昭和初期にかけての写真や地図などを通じて、中也が訪れていた当時の横浜の姿に迫りました。

中也は横浜を舞台にして詩を6篇ほど制作しています。具体的な町の名前

は登場しませんが、横浜らしい港町の風景や異国情緒が詩に描かれています。

ここでは、5篇の詩を紹介し、「横浜」という視点から詩を読み解きました。

◎紹介した詩「秋の一日」「かの女」「春と恋人」「臨終」「港市の秋」



### 《主な出展資料》

中原中也原稿「春と恋人」「かの女」、「日記（雑記帖）」、「ボン・マルシェ日記」、安原喜弘宛書簡（1937年9月2日ほか）、E・S・モース「Japan Day by Day」、「改正 銅版横浜地図」、中原フク述・村上護編「私の上に降る雪は わが子中原中也を語る」、「日痴群」第2号



# 中也、この一篇

## 「汚れつちまつた悲しみに……」

2025 10月8日 Wed. ↓ 2026 4月19日 Sun.

中原中也の代表作をじっくりと味わうシリーズ企画、第5回目は「汚れつちまつた悲しみに……」を取り上げました。この作品は中也が22歳頃、雑誌「白痴群」第6号に発表し、のちに第一詩集『山羊の歌』に収録されました。本展では、作中で用いられている技法をはじめ、詩の背景などさまざまな角度から作品を読み解きました。



### 展示1 詩の背景

「汚れつちまつた悲しみに……」は、1929年頃初稿が書かれたと考えられ、雑誌「白痴群」第6号に掲載されました。のち、詩集『山羊の歌』に収録されますが、詩集の校正刷りには第二連と第三連を入れ替える指示が残っており、詩集収録時に大きな変更があったことがわかります。

ここでは、当時の中也の状況や詩の言葉の変遷などを紹介しながら、創作の背景に迫りました。

### 展示2 様々な技法

「汚れつちまつた悲しみに……」は、同じ言葉を何度も繰り返すリフレインや、七五調のなかにあえて八音を入れる独特のリズム構成、東京弁を意識したようなぞんざいな口調など、随所に表現の工夫がこらされています。

ここでは、詩の中に用いられた様々な技法について解説しました。

### 展示3 イメージの源泉を探る

ここでは、詩の中に登場する「雪」や北原白秋の詩の影響などを読み解きながら、作品に登場する言葉について深く掘り下げました。



### 展示4 「汚れつちまつた悲しみ」とは?

本作は「悲しみ」そのものが身体を得たような描き方がなされ、さらに「汚れつちまつた」という言葉と組み合わせられることで、独特の世界が広がっています。

ここでは、小林秀雄がこの詩について書いた文章などを紹介しながら、中也が表現しようとしたものは何かを考察しました。

### 展示5 「今」につながる詩の言葉

「汚れつちまつた悲しみに……」は教科書や詩集を通して知られるようになり、中也の詩の中でも最も有名な作品になりました。その影響は文学の世界に留まらず、音楽や漫画など様々な分野に広がっています。

ここでは、「汚れつちまつた悲しみに……」に影響を受けた様々な作品を紹介しながら、中也の詩が持つ現代性と言葉のインパクトについて紹介しました。また、「関連図書コーナー」を設置しました。



#### 《展示資料》

中原中也「ノート小年時」、中原中也詩集『山羊の歌』、『山羊の歌』校正刷（「汚れつちまつた悲しみに……」部分）、北原白秋詩集『思ひ出』、『白痴群』第6号、浅田弘幸原稿「私が選ぶ中也の詩」、桑田佳祐CD『君にサヨナラを』

## 吉田 漣生氏旧蔵中原中也関係資料

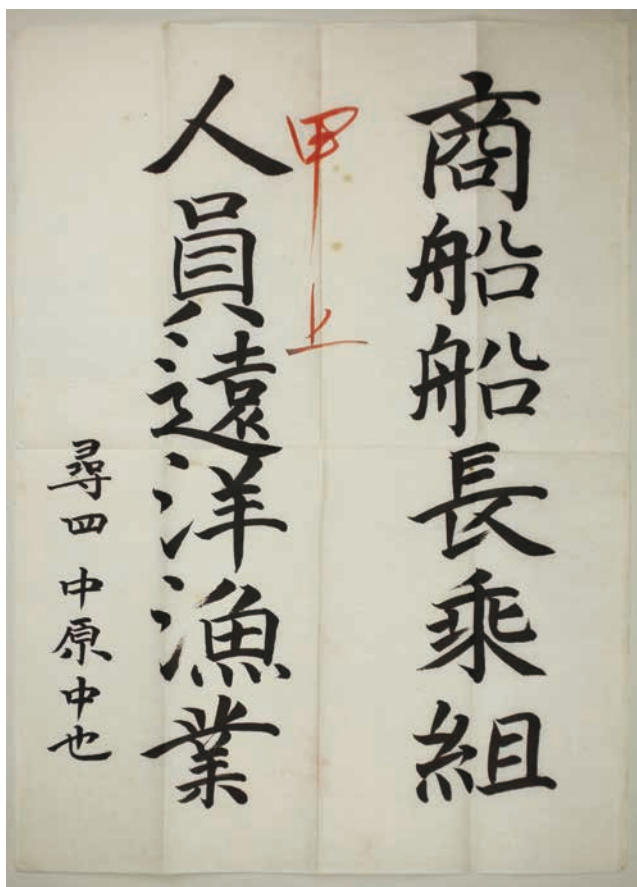
2025年、吉田漣生よしだひろお氏のご遺族より、中原中也の習字「商船船長乗組人員遠洋漁業」、吉田漣生宛書簡（中原思郎筆3点、大岡昇平筆1点）ほか、中原中也関連資料43点をご寄贈いただきました。吉田氏は中原中也の研究者として知られ、第三次・

第四次の『中原中也全集』の編集にも尽力されました。

中也の習字は、小学校4年生の時に書いたもので、これまで存在を知られておらず、大変貴重です。なお、この習字には中也の弟・中原思郎の書簡が添えられており、第三次『中原中也全集』（全5巻

+別巻1、1967-1971年、角川書店）完成の折に、感謝の意を込めて吉田氏に贈られたものであることが分かります。

当館では、新春にちなんで、2026年1月4日〜12日の間、中原思郎の書簡とともに中也の習字の特別展示を行いました。



### 吉田 漣生（よしだ ひろお）1930-2000

1930年広島県出身。東京大学大学院博士課程中退。東京女子大学、千葉大学、大妻女子大学、城西国際大学の教授等を歴任。日本近代文学の研究者として、中原中也、小林秀雄、大岡昇平等の研究に尽力し、多くの研究書の編集等も手がけた。邦楽家・中島雅楽之都の研究も行う。主な著書に『評伝中原中也』、編著に『鑑賞日本近代文学20 中原中也』『近代文学鑑賞講座 17 小林秀雄』『鑑賞日本現代文学 26 大岡昇平・武田泰淳』（共編著、大岡担当）ほか。『大岡昇平全集』編集委員。

# 記念館ニユース

## さようなら旧市庁舎 プロジェクト

2025年5月23日から6月1日にかけて、山口市役所旧市庁舎を会場に、「さようなら旧市庁舎プロジェクト——ハシワワタス——」が開催されました。本プロジェクトは、2025年5月に山口市庁舎が新庁舎に移転するにあたり、旧庁舎の解体が始まるまでの期間、この建物を活用したアートイベントを行ったものです。当館は本プロジェクトに展示で参加しました。

中也が小学5年から2年間通った山口師範学校附属小学校は、山口市役所の新旧庁舎が建つ敷地にありました。中也が文学に傾倒する契機の一つとして、附属小学校で教生をしていた後藤信一との交流があったと考えられています。

中也が後藤に会いに訪れ、二人が語り合ったという、山口師範学校の寄宿舎があった場所（現在は山口市民会館が建っている）を窓から望める旧市庁舎建築課を会場として、附属小学校に通っていた当時の中也を紹介するパネル展示を行いました。

また、関連企画として、当館展示

室において、附属小学校時代の成績が記された「教育手帳」と、小学6年の「読方問題」の解答用紙を展示しました。



## 公開講演 福島泰樹氏 短歌絶叫コンサート 「中原中也、復活の歌」

2025年9月6日、公開講演として歌人・福島泰樹氏による短歌絶叫コンサート「中原中也、復活の歌」を開催しました（共催・中原中也の会）。

福島氏が長年、ライフワークとして続けている「短歌絶叫コンサート」は、歌謡の復権・肉声の回復をスローガンに掲げ、詩歌を音楽の演奏とともに朗読するパフォーマンスです。今回は第30回中原中也の会大会



のメインプログラムでもあり、テーマの「中原中也と朗読」に合わせ、中也の詩を中心とした構成となりました。

福島氏の短歌を交えた独自のアレンジによる朗読に観客は魅了され、朗読の合間には、中也の弟・拾郎氏との交流についての貴重なエピソードや、福島氏が抱く中也への思いも語られました。詩を声で届けることの素晴らしさ、「詩は音楽だ！」という福島氏の言葉を体感した圧巻のステージでした。



## 第10回ぼうしの詩人賞

「あつまれ！未来の中也たち！」  
 & 10周年関連事業

山口市内の小学生と中学生を対象にした、詩のコンクール「ぼうしの詩人賞」が、今年度10回目とむかえました。「あつまれ！未来の中也たち！」というキャッチフレーズには、山口に生まれたからこそ中原中也を知ってほしい、この賞をきっかけに詩に親しむ機会になればという願いが込められています。

夏休みには、10周年を記念して詩をつくるワークショップ「ねえ、詩っておもしろいつちゅうや?」を開催。午前は身体を動かし、オノマトペの効果や言葉の思いがけない組み合わせの面白さなどについて学び、最後は自分の名前を詠み込んだ詩作に取り組みました。午後は小・中学生9人のみなさんと詩をつくるだけでなく、他の人がつくった詩を審査する体験も。ほかの人の作品に向き合うこと、そして詩作のポイントなどを吸収しながら充実した時間をすごしました。



2025年8月3日 詩作ワークショップ

今回の第10回には、304篇の応募があり、ぼうしの詩人賞（最優秀賞）1篇、優秀賞4篇、館長賞4篇が選ばれました。

12月6日に表彰式・作品朗読会を小郡地域交流センターで開催しました。表彰式後、朗読を好んだ中にもならない、それぞれが自作の詩を自分の声のせて表現しました。

### 入選作品

第10回ぼうしの詩人賞・最優秀賞

「海の世界」 金川 望輝人さん

### 優秀賞

「ギョラクシースープ」 徳田 仁さん

「オーケストラのまほう」 原田 樹さん

「理想郷」 浅野陽佑さん

「書斎の机の天板に」 西口愛音さん

### 館長賞

「そら」 田中希実さん

「とんび」 藤井亮哉さん

「フツウ」 阿武璃珠さん

「星空」 住田隆起さん

館内での展示期間中には「子どもたちの詩があった」と書かれたアンケートが必ずあるほど、子どもたちが持つ視点、感じるころ、それを表現する言葉選びに、大人たちは驚かされます。その作品からは、詩と詩をつくる自分に向き合う姿が見えてくるようです。

また、あわせて10周年記念朗読会も開催しました。過去の入選者に、あの時の自分に出会うように、当時の入選作品を朗読してもらおう企画です。ひとまり成長したみなさんと再会できて、10年という時間の速さと重みを改めて感じました。さらに2026年2月には、全10回の入選作品をまとめた記念誌を発行し、市内学校、県内図書館などへ配布しました。「未来の中也」を、ぞくぞく発掘している（！）「ぼうしの詩人賞」をこれからも見守り、ぜひ応援してください。



2025年12月6日 10周年記念朗読会

※記念館WEBページにて、過去の入選作品がご覧いただけます。



- 2025年  
4月1日 特別展示 震災復興応援企画(前年度から継続)  
当館と福島市およびNPO法人「創る村」との交流事業を紹介
- 4日 温泉街の朗読会(～5日)  
湯田温泉白狐まつりのイベントとして共催実施
- 16日 企画展Ⅰ「中也と横浜」(～7月27日)  
特別展示 第30回中原中也賞(～5月22日)
- 19日 YCAM シネマ連携映画「ゆきてかへらぬ」上映(～5月6日)
- 25日 第247回 中原中也を読む会  
第30回 中原中也賞受賞詩集 高村而葉  
『生きていくものはいつも赤い』を読む
- 28日 YCAM シネマ連携映画「眠れ蜜」上映(～5月6日)  
生誕祭関連イベント  
狐の足あとコロポ企画(～30日)  
期間限定中也メニュー提供
- 29日 生誕祭「空の下の朗読会」(前庭)  
自由参加の朗読会、中井智彦ミニライブ  
第30回 中原中也賞贈呈式(ユウベルホテル松政)  
受賞詩集:高村而葉『生きていくものはいつも赤い』  
記念講演「毒のごとく清きもの—中原中也の詩と手紙」  
講師:北川透  
主催:山口市、(公財)山口市文化振興財団  
中也 web 朗読会(オンライン)  
中也または自作詩の朗読を動画でX投稿
- 5月8日 文豪ストレイドッグス×中原中也記念館 コラボ第3弾(～6月30日)  
パネル展示、フォトスポット設置  
オリジナルグッズプレゼント(アニメイトイオン防府)  
パネル展示、フォトスポット設置、中也カフェメニュー提供  
(狐の足あと)
- 23日 「さようなら旧市庁舎プロジェクト—ハシワタス—」関連展示  
(～6月1日)  
第248回 中原中也を読む会(山口市役所旧庁舎)  
「さようなら旧市庁舎プロジェクト—ハシワタス—」の中原中也関  
連展示等見学
- 6月27日 第249回 中原中也を読む会  
企画展Ⅰ「中也と横浜」見学
- 7月25日 第250回 中原中也を読む会  
屋外展示「朝の詩」(前期)を読む
- 31日 特別企画展「中原中也の〈声〉——朗読とラジオ放送」(～10月5日)  
オープニングセレモニー開催
- 8月3日 ぼうしの詩人賞10周年記念ワークショップ  
「ねえ、詩って おもしろいっけや?!(湯田地域交流センター)  
午前の部:小学1～3年生、午後の部:小学4～中学3年生
- 11日 特別企画展関連イベント  
吉増剛造 講演会[中止]
- 15日 特別企画展連動企画  
「CHUYA STATION 2025」YouTube 公開
- 17日 特別企画展プロムナード・トーク① 展示解説

- 22日 第251回 中原中也を読む会  
特別企画展「中原中也の〈声〉——朗読とラジオ放送」見学
- 31日 機関誌「中原中也研究」第30号発行
- 9月6日 公開講演 短歌絶叫コンサート  
「中原中也、復活の歌」(セントコア山口)  
出演:福島泰樹 共催:中原中也の会
- 20日 特別企画展プロムナード・トーク② 展示解説
- 26日 第252回 中原中也を読む会  
立原道造の詩を読む
- 10月8日 企画展Ⅱ「中也、この一篇——「汚れつちまつた悲しみに……」  
(～2026年4月19日)
- 18日 中也忌関連イベント  
経塚墓地(吉敷)での墓前祭、中也へのメッセージお供え  
メキシ交換会(～19日)  
共催:山口県立大学「中原中也メキシ交換会運営委員会」  
秋のブックリサイクル(エントランスホール)  
狐の足あとコロポ企画(～22日)  
期間限定中也メニュー提供
- 22日 中也命日
- 24日 第253回 中原中也を読む会  
屋外展示「朝の詩」(後期)を読む
- 11月28日 第254回 中原中也を読む会  
谷川俊太郎の詩を読む
- 12月2日 第10回「ぼうしの詩人賞～あつまれ!未来の中也たち!～」  
入選作品展示(～2026年2月23日)
- 6日 第10回「ぼうしの詩人賞～あつまれ!未来の中也たち!～」  
表彰式・入選作品朗読会(小郡地域交流センター)  
ぼうしの詩人賞10周年記念朗読会(小郡地域交流センター)
- 26日 第255回 中原中也を読む会(湯田地域交流センター)  
福田百合子名誉館長と中也の詩「寒い夜の自我像」を読む
- 2026年  
1月23日 第256回 中原中也を読む会  
企画展Ⅱ「中也、この一篇——「汚れつちまつた悲しみに……」  
見学
- 2月18日 開館32周年  
第23回テーマ展示「詩集『在りし日の歌』」(～11月29日)
- 27日 第257回 中原中也を読む会(湯田地域交流センター)  
蓄音器で中原中也と同時代の音楽を聴く
- 28日 ぼうしの詩人賞10周年記念作品集発行
- 3月27日 第258回 中原中也を読む会  
第23回テーマ展示「詩集『在りし日の歌』」見学
- 31日 館報第31号発行

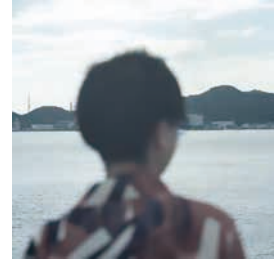
## 中原中也の会

- 2025年  
6月15日 中原中也の会第28回研究会「直筆原稿で読む中原中也」  
(國學院大學院友会館)  
総合司会:中原豊  
研究発表  
発表:武久真士、齋藤樹里  
司会:佐藤元紀  
小講演「可能性としての中原中也」  
講師:佐々木幹郎  
パネルディスカッション「直筆原稿で読む中原中也」  
パネリスト:多田蔵人、佐々木幹郎  
司会:中原豊  
・報告「どの言葉を選ぶか?—中原中也の直筆から」  
報告者:多田蔵人  
・ディスカッション

- 7月31日 会報第58号発行
- 9月6日 中原中也の会第30回大会「中原中也と朗読」(セントコア山口)  
総合司会:カニエ・ナハ  
開幕朗読  
朗読:原田樹、久野さい、じいざす♡大悟  
トークセッション「中也の声を探して」  
出演:桑原滝弥、三角みづ紀、カニエ・ナハ  
短歌絶叫コンサート「中原中也、復活の歌」  
出演:福島泰樹
- 2026年  
1月31日 会報第59号発行

## 第31回中原中也賞

### 『彼方の幽霊』



第31回の中原中也賞は、公募および推薦による267の詩集の中から、成清朔氏の『彼方の幽霊』（私家版）が選ばれました。

成清朔氏は1999年愛知県生まれの26歳（受賞時）。2024年から詩の投稿をはじめ、『現代詩手帖』の新人投稿欄にいくつかの詩が掲載された後、2025年11月、表題作を含む19篇の詩を収めた第一詩集『彼方の幽霊』を自費出版し、今回の受賞に至りました。

『彼方の幽霊』は、他の詩集にはないほどの緊張感や挿らぎを詩に捉えようとする試み、世界に対する疑念との向き合い方が評価された。「ゼロ年代詩」を想起させるという意見もあったが、それでもなお今を生きる個人の主体と身体を詩に導き入れようとしていることや葛藤が見て取れ、そこに評価が集まった。議論を重ねた結果、第31回中原中也賞は全員一致で成清朔『彼方の幽霊』に決定した。

〔選評〕より

なりきよ  
さく  
成清朔氏

昼の森を歩く

幽霊たちの潮風を蹴り上げる薄明るい裸足

彼らは各々のクローゼットからここへやって来た

それはともながいあいだ繰り返してきた空想

親しい木のひとつに凭れて片結びを繰り返すように

忘れないための呪いを唱え続けるように

文字を起こすときの静止画や

すっきり擦り切れてしまった襪履へ

それぞれに意思のある指先を走らせて

植物文様に響きあう音叉

彼らは意味をもたない中点であり

幾多の意味を含んだその他であり

あるいは、使い込まれた単語帳の

色が剥げ落ちてほとんど透明のフィルターになった

付箋が紐づける言葉の、そのなかにもいるだろう

〔「彼方の幽霊」より〕



### 2026(令和8)年度 記念館事業・関連行事予定

### 2026年4月-2027年3月

#### 展示

第23回テーマ展示

詩集『在りし日の歌』

(2月18日～11月29日)

企画展Ⅰ コラボレーション展示

萩の陶工と中原中也 土の诗情

(4月22日～7月26日)

特別企画展

詩の燈籠—高森文夫と中原中也

(7月30日～10月4日)

企画展Ⅱ

やまぐちの詩人・和田健の軌跡

(前期:10月7日～11月29日)

(後期:2027年2月18日～4月11日)

第24回テーマ展示

中也の住んだ町(仮)

(2027年2月18日～2028年2月13日)

屋外展示

故郷の詩

(5月～2027年4月)

#### イベント・記念日

湯田温泉 白狐まつり

(4月4日、5日)〈無料開館日〉

生誕祭 空の下の朗読会

(4月29日 中原中也記念館前庭)

〈無料開館日〉

中也忌

(10月22日)〈無料開館日〉

開館33周年

(2027年2月18日)〈無料開館日〉

#### 中原中也を読む会

毎月 第4金曜

中原中也記念館ほか

#### 中原中也の会

中原中也の会第29回研究会  
(6月6日 神戸女子大学教育センター)

中原中也の会第31回大会  
(9月5日 セントコア山口)

※日程等、変更の場合もございます。

改修工事による臨時休館：2026年12月1日～2027年2月14日